

(そとばこまち)
卒都婆小町

四番目物
特殊物

観阿弥原作・世阿弥改作

場景 京の南西、鳥羽の辺り。桂川の見える道。朽ち果てた卒都婆が路傍に。ある日の夕暮れから夜にかけて。

人物

シテ 小野小町(老女)〔姥・水衣女〕
ワキ 高野山の僧〔着流僧〕

ワキヅレ 随伴の僧〔着流僧〕

梗概 高野山の僧が仏教に逢い得た喜びを述懐しつつ供の僧と都に上る途中、鳥羽(ワキ)の流派により阿倍野の辺りで、老醜の身を恥じ都をのがれ出た乞食の老女に出会う。朽木と思ひ倒れた卒都婆に腰をかけている老女を見とがめた僧は、老女を教化(きふ)してやろうと、仏体そのものである卒都婆の功德を説き聞かせる。ところが老女は、僧の言葉にいちいち反論し、迷悟は心の問題であり、本来無一物と気付けば仏も衆生も隔りはないと論破する。教化するつもりが逆に言い負かされた僧は恐れ敬い頭(かしら)を地につけ三拝する。勝ち誇る老女はさらに「極楽の内ならばこそ惡しからめそとはなにかは苦しかるべき」と戯れの歌を詠み立ち去ろうとするが、僧に名を問われ小野小町と答える。昔は世の男どもを魅了した才色兼備の小町も、今は乱れた白髪に破れ笠をいただき汚れた袋を首にかけ、路頭にさすらいの人に物を乞う身の上だった。突然、小町は狂乱し「小町の許へ通おう」と叫び「人恋しい」と訴える。小町を慕って九十九夜通い続けながら、思いを遂げずに死んだ四位少将(少将)の霊が憑いたのだった。恨みを抱き小町に憑依した少将の

怨霊は、月の夜も闇の夜も、雨の夜も風の夜も通い続けた百夜(もも)通いのさまを繰り返す。やがて憑いた霊も去り、小町は後生安穩を願う。

素材・主題 かつて艶麗驕慢を誇った小町が百歳(もも)の姥となつて老殘落魄の身を路頭にさすらい話の源流は、平安末には成立していた玉造小町子壮衰書である(岩波文庫所収)。玉造小町と小野小町は別人であるが、中世には同一視されていた。同書の詩句を多用する本曲は、老殘の小町が教化の僧と卒都婆問答を展開し、論破擲論する姿を痛快に描くとともに、「通小町」に脚色された四位少将百夜通いの話(同曲参照)を、少将の霊が小町に憑依する形で描き、きわめて劇的変化に富む。乞食の老女が機鋒鋭く論破する教義問答は諧謔の歌とともに秀句的面白さがあり、美貌を誇った昔の追憶、突然襲う憑き物による狂乱(思い故の物狂いの要素もしのばせて)、百夜通いの再現と、いずれも描写にすぐれ、飽きさせない。申樂談儀によると観阿弥の原作はもつと長く、小町の登場歌がもう一段あり、後半には小町が「その辺りに玉津島の御座あるとて」幣帛(へい)を捧げると、玉津島明神の使者の鳥が出現する場面があった。老巫女が神樂を奏するや熊野権現の使者護法善神が来現する魔曲「護法」と同じ終結であつたらしい。なお、男の亡霊が女に憑く曲例に、和泉式部に恋した賤の男の霊が式部の子の小式部に憑依する魔曲「稻荷」があるが少ない。

一さほど深い山ではないが、そこに隠棲し修行する心の奥は深い。「捨る身の置所なる柴の庵 山も浅きやうき世なるらむ」(基玖波集二十)。仏道修行の心境。二現和歌山県。空海創建の金剛峰寺(真言宗)がある霊場。なお古写本(妙庵本)には「われこのたび都に上り、只今わが山に帰り候」とある。

三前仏は釈迦如来、後仏は弥勒菩薩。釈迦滅後、五十六億七千万年後に現れ衆生を救うのが弥勒菩薩。現在はその中間にある。四人間として生をうける事は難しく、ましてや仏縁に遇う事はさらに難しい。その釈迦の教えに遇えた事が悟りへの機縁になるのだ。「何況人身難レ受、仏法難レ遇」(六道講式)。「それ受けがたき人身を受け」(高野物狂)。五ひたすら信じ出家して。圓偏(えんへん)一重。圓ひとへなる一墨の衣。六生まれる以前の万物本来の实体を悟れば、すべて平等無差別で親子恩愛の情に迷う事もない。禪宗の慣用語父母未生以前自己(正法眼蔵・溪声山色)に基づく。この(上)歌は「花月」と同文。セ一所不住の修行の身こそ真の安住の境涯。ハワキは鳥羽(または阿倍野)に着いたという(着キゼリフ)の後、脇座に着く。九後見が朽ちた卒都婆に見立てた床几を舞台真中に据える。離子につれてシテは笠を着、杖を

登場人物

シテ 小野小町 姥・縷水衣・無紅縫箔腰巻
(物着で風折烏帽子・長絹)
ワキ 高野山の僧 角帽子・紺水衣・小格子厚板
ワキ連 従 僧 角帽子・縷水衣・無地熨斗目

構成と梗概

- 1 ワキの登場 高野山の僧(ワキ)が、従僧(ワキ連)と共に登場、仏法帰依の出家の心境を述懐。
- 2 シテの登場 老残の小野小町(シテ)が盛時を懐古し、現在の老醜を恥じて都のがれ、高野山へ到る途中で、卒都婆を朽ち木と思ひ腰かけて休息する。
- 3 ワキ・シテの応対 老女が卒都婆に腰かけるのを見付けた僧は、教化せんとして卒都婆問答となり、老女に論破される。
- 4 シテの告白 老女は小町の成れの果てであると名乗り、往時の艶麗と殿上の交わり、現在の老衰と乞食の日々を語る。
- 5 シテの狂乱 深草の少将の霊の憑依による俄かの狂乱。
- 6 シテの狂乱 深草の少将の百夜通い。
- 7 結末 後生安穩を願う供養の勧め。

備考

* 四番目物。太鼓なし。

* 観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流にある。

* 底本役指定は、シテ、ワキ、ツレ、二人、同、地。

一「山は深山ではないが、そこに隠棲して修行する心は深い」。「浅き」は「深き」と対の文飾。高野山中における仏道修行をいう。「抑この高野山たかのさんと申すは：末世の隠所として結界清浄の道場たり」(《高野物狂》)。ワキ連の指定、底本になし。現行で補う。以下同じ。

二「かやうに候ふ者は高野山より出でたる僧

にて候、われこのたび都に上り、只今わが山に帰り候」とする古写本(妙庵手沢本)がある。高野山(和歌山県)は弘法大師草創の霊場。

三前仏(釈迦如来)滅後、五十六億七千万年後に後仏(弥勒菩薩)が出現して衆生を済度すると信じられた。現在はその中間にある。「生仏前仏後之中間、無_ニ出離解脱之因縁_一」(『愚迷発心集』)。

四「六趣四生を輪廻する生類にとつて、人間に生れることはまことに難かしく、さらにその人間にとつて仏法に縁をもつことも極めて難かしい」。「何況人身難_レ受、仏法難_レ遇」(『六道講式』)による慣用句。「如来の仏教」は釈迦の教え。それが「悟りの種」(出離解脱之因縁)となる、の意。

五「ひたすらに思い、出家して」。

六「前世の因縁を悟り、生死迷妄の世界を超越すれば、憐れみ思う親もなければその親に思いをかける子もなく、肉親恩愛の情に迷うことはない」。この「上ゲ歌」は《花月》と同文。

【次第】でワキとワキ連が登場 正面先に立ち並ぶ

〔次第〕 向き合つてヤマアサ
ワキ連へ山は浅きに隠れがの 山は浅きに隠れがの 深きや
心なるらん

〔名ノリ〕 正面へ向きニ
ワキ「これは高野山こやさんより出でたる僧にて候 われこのたび
都に上らばやと思ひ候

〔サシ〕 ワキへそれ前仏ゼンブツはすでに去り 後仏ゴブツはいまだ世に出でず
向き合つて
ワキ連へ夢の中間チウゲンに生まれ来て なにを現ウツと思ふべき たまたま受け
がたき人身ニンジンノを受け 遇アひがたき如来ニョライの仏教ブツキョに遇アひ奉ること これぞ
悟りの種サトタネなると

〔下ゲ歌〕 向き合つたまま五 (偏・一重)
ワキ連へ思ふ心のひとへなる 墨スミの衣コロモに身をなして

〔上ゲ歌〕 ワキ連へ生まれぬ前の身サキを知れば 生まれぬ前の身サキを知れ

一〈千里を遠しとせず出かけ、野山に臥す一所不住の身だが、これこそ仮りの住みか（人間世界）の真の安住というものだ〉。

二 阿倍野（現大阪市阿倍野区）に着いた旨をいう。流儀により鳥羽（次頁注一一参照）とも。

三〈浮草のような憂き身を、もはや昔と違つて誰も誘う者のない悲しさよ〉。「詫びぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」 2

〔古今集〕雑下、小野小町。仮名序にも。

四〈おごり高ぶること極めて甚だしく〉。「壮時僛慢最甚」〔玉造小町子壮衰書〕。

五〈翡翠（川蟬。鳥の名）の羽のような美しい髪ざし（髪の様子）はなまめかしくしなやかで、春風に靡く楊柳のようだ〉。「婀娜腰支誤楊柳之乱春風」〔玉造小町子壮衰書〕。婀娜は腰支の形容を転用。

六〈鶯が鳴くような美声のちよつとした物言いは、糸萩のほんのわずか散り初めた花よりも珍らかで愛らしい〉。「鶯轉三春之始」〔玉造小町子壮衰書〕、「露トアラバ…閑言」〔連珠合璧集〕。

七〈昔は殿上の交わりなりし身を〉今は民間の賤しい女にまで汚ながられ。

八〈嬉しくもない月日が積り（年をとつて）〉。

九〈人目の多い都は気がひける。もしも小町と噂されるかも知れない〉。

一〇〈夕月の出るとともに都を出、西へと行くが、内裏の番人でもこんな悲惨な者をまさか咎め立てますま

ば 憐れむべき親もなし 親のなければわがために 心を留むる子もなし 千里を行くも遠からず 野に臥し山に泊まる身の これぞまことの住みかなる これぞまことの住みかなる 〔着キゼリフ〕の後 脇座に着座

後見が卒都婆に見立てた床几を真中に据える 〔習ノ次第〕でシテが笠を着杖を突きつつ登場 幕を出て杖にすがり休息の後一ノ松に立つ

〔次第〕 シテへ身はうきくさを誘ふ水 身はうき草を誘ふ水 なきこ

そ悲しかりけれ

〔サシ〕 シテへあはれやげにいにしへは 僛慢最も甚だしう 翡翠の

髪ざしは婀娜と嫋やかにして 楊柳の春の風に靡くがごとし また

鶯舌の轉りは 露を含める糸萩の かごとばかりに散り初むる 花

よりもなほ珍らしや 今は民間賤の女にさへ汚まれ 諸人に恥をさ

らし 嬉しからぬ月日身に積もつて 百歳の姥となりて候

〔下ゲ歌〕 シテへ都は人目慎ましや もしもそれとかいふまぐれ

〔上ゲ歌〕 シテへ月もろともに出でて行く 月もろともに出でて行

く 雲居百敷や 大内山の山守りも かかる憂き身はよも咎めじ

一 卒都婆が仏体であることの理由。

二 卒都婆とは、金剛薩埵（真言付法第二祖）が仮りに衆生に教え示すために大日如來の誓願を形に表わしたものだ、の意か。「出仮」底本のまま（『謠抄』による）。「三摩耶形」は仏の本願を象徴する器物や印契。大日如來の三摩耶形が卒都婆。「密教意者、塔婆者大日如來三摩耶形也」（『言泉集』）。

三 〈現わし出した形とはどういうものか〉。

四 この世に存在する物の根源となる五要素。五大。
五 〈肉体も五大成身、なんの違ひがあるものか〉。五大の表象が五輪。なお底本「五体」を訂正。

六 一度卒都婆を見れば永く三惡道（地獄・餓鬼・畜生）を離る。「何況造立者、必生安樂國」と続くのが定形で、それをふまえていう。卒都婆造立供養の文。

七 「一念發起菩提心、勝於造立百千塔、宝塔破壊成微塵、菩提心熟成仏道」（『菩提心論』の句と信じられて中世に流布）を、「一見卒都婆」と対比させて反論。「菩提心」は悟りを求める心。
八 〈どうして出家しないのか〉。

九 〈姿が世を厭うこと（出家）になるものか、心こそが肝心だ〉。〈その心がないからこそ、仏体（卒都婆）が分らないのではないか〉。
一〇 〈どうせ倒れ臥した卒都婆だもの、私が休むのに不都合があるものか〉。

一一 順縁（善事による仏縁）も逆縁（惡事がかえって仏縁となる）も所詮は同じだ、の意。

らざらん 「さて仏体たるべき謂はれはいかに
ワキ連へそれ卒都

婆は金剛薩埵 仮りに出仮して三摩耶形を行ひ給ふ
ワキ連へ三摩耶形を行ひ給ふ

せる形はいかに
ワキ連へ地水火風空 シテ（へ）五大五輪は人の体

なにしに隔てあるべきぞ
ワキ連へ形はそれに違はずとも 心功徳

は変わるべし シテ「さて卒都婆の功徳はいかに
ワキ連へ一見卒都

婆永離三惡道 シテ（へ）一念發起菩提心 それもいかでか劣る
ワキ連へ菩提心あらばなど憂き世をば厭はぬぞ

べき
ワキ連へ菩提心あらばなど憂き世をば厭はぬぞ シテ（へ）姿

が世をも厭はばこそ 心こそ厭へ
ワキ連へ心なき身なればこそ 仏

体をば知らざるらめ シテ「仏体と知ればこそ卒都婆には近づき

たれ
ワキ連へさらばなど礼をばなさで敷きたるぞ シテ（へ）と

ても臥したるこの卒都婆 われも休むは苦しいか
ワキ連へそれは

順縁にはづれたり シテ「逆縁なりと浮かむべし
ワキ連へ提婆

が悪も シテ「觀音の慈悲
ワキ連へ槃特が愚癡も

智慧
ワキ連へ惡といふも シテへ善なり
ワキ連へ煩惱といふ

二 提婆達多^{だいだ}の惡（五逆により地獄に墮ちるが後に成仏）も觀音の慈悲も所詮は同じ、また、周梨槃特^{しりはんて}（仏弟子中の愚者で後に大悟）も、智慧の文殊も所詮は同じだ、の意。『肝心集』等にも見える類型的対比。

三「此宗（天台）ニハ、善惡不二、邪正一如、煩惱即菩提、生死即涅槃ト心得テ」（『峰相記』）等、中世流布の成句に基づく。

四「迷いも悟りも所詮は同じことだ」。

五「菩提樹に譬える身は、元來樹木ではなく、明鏡台に譬える心も鏡台にあるわけでない。それらは本來無一物、菩提心（悟り）とは仏も衆生も不二同体の境地だ」。「菩提本無樹、明鏡亦非台、本來無一物、何処惹塵埃」（『六祖法寶壇經』）等。神秀の「身是菩提樹、心如明鏡台」に対する慧能の反論）に基づく。

六「これらのことは、元來愚かな衆生を救うための方便で、仏の深い御誓願は衆生済度にあるのだから、たとえ逆縁であつても成仏出来るのだ」。この一句、觀世以外は繰返し。

七 乞食のこと。乞食非人とも。

八 叩頭三拜。懺悔な表敬。

九「極樂の内ならば卒都婆（仏体）への無礼は悪かろうが、外ならば仏も衆生も同じこと、それなら差支えありますまい」。出典がある筈だが未詳。

二〇「へしちめんどうな説教だこと」。教化への揶揄。

二一 小野小町の出自として中世以降最も流布した説。良実は篁の二男。

卒都婆小町

も シテへ菩提なり ワキ連へ菩提もと シテへ樹にあらず

ワキへ明鏡また シテへ台になし

〔歌〕 正面へ向き 本来一物なき時は 仏も衆生も隔てなし

〔上ゲ歌〕 正面へ向き 愚癡の凡夫を 救はんための方便の 深き誓

ひの願なれば 逆縁なりと浮かむべしと 懇に申せば まことに

悟れる非人なりとて 僧は頭を地に付けて 三度礼し給へば

正面へ向き われはこの時力を得 なほ戯れの歌を詠む

〔下ノ詠〕 シテへ極樂の内ならばこそ悪しからめ そとはなにか

は 苦しかるべき

〔歌〕 地へむつかしの僧の教化や むつかしの僧の教化や 立つてその場

〔問答〕 ワキ「さておことはいかなる人ぞ名をおん名乗り候へ

シテ「恥づかしながら名を名乗り候ふべし

〔名ノリグリ〕 正面へ向き 小野の良実が娘 小野の小

町が成れる果てにてさむらふなり

一「遊女」底本のまま。中世の小町像は遊女（歌舞の芸に長じた女）で、「吾ハ是倡家ノ子、良室ノ女焉」（『壮衰書』）とし、『二道』にも遊女とする。

二「花のような容姿は美しく、三日月型に引いた美しい眉墨はつややかで」。「桂の黛」は美貌の慣用句。

三「面不絶白粉」（『壮衰書』）。底本「絶さず」。

四「薄物や綾絹の衣装は一ぱいで、立派な御殿に溢れるほどだった」。「羅綾之衣、多余桂殿之間」（『壮衰書』）。なお、下掛りは以下さらに小町の形容が続く。解題参照。

五底本「詠」。詠吟し、酔を勧める盃を手にとれば、あたかも天漢の月が静かに袖に宿っているかのようだ。「手取鸚鵡之觴、漢月落而影静」（『壮衰書』）。

六「いつの頃からかその栄華とうって交り」。

七霜の置く雑草のごとく乱れた白髪。「頭如霜蓬」（『壮衰書』）。

八「美しかった両鬢の毛も艶を失って膚にまつわり、その膚はやつれて黒い斑点がしみつき、まるく曲線を描いて遠山の翠を思わせた両眉もその趣きを失っている」。「嬋娟両鬢秋蟬翼、宛転双蛾遠山色」（『和漢朗詠集』妓女、白楽天）。「膚似凍梨」（『壮衰書』）。

九三二七頁注二三参照。「九十九髪」に諸説があるが、百に一足らぬ意で、白髪と解されている。

一〇有明（月）の影（光）に照らされるわが影（姿）の恥ずかしさ。「月は見ん月には見えじとぞ思ふ憂き世にめぐる影も恥かし」（『落書露頭』）。

「サシ」
着座のまま
ワキ連へいたはしやな小町は さもいにしへは遊女にて 花

の容輝き
カタチカカヤ カツラ マユズミアオ
桂の黛青うして 白粉を絶えさず 羅綾の衣多うして

桂殿の間に余りしぞかし
グイデン アイダ アマ
シテへ歌を詠み詩を作り 地へえいを

勧むるさかづきは
スス (盃・月) カンゲツ
漢月袖に静かなり

「下ゲ歌」
着座のまま
地へまこと優なる有様の 一つそのほどに引きかへて

「上ゲ歌」
地へ頭には 霜蓬を戴き 嬋娟たりし両鬢も 膚にかしけ

て墨乱れ
スミミダ エンネン
宛転たりし双蛾も 遠山の色を失ふ

「下ゲ歌」
地へ百歳に 一歳足らぬつくも髪 かかる思ひはありあけ

の 影恥づかしきわが身かな
カゲ 笠で顔を掩う
シテは立ち上る

「ロンギ」
常座で
地へ頭に懸けたる袋には いかなる物を入れたるぞ

シテへ今日も命は知らねども 明日の飢を助けんと 栗豆の餉を 袋

に入れて持ちたるよ 地へ後に負へる袋には シテへ垢膩の垢づ

ける衣あり 地へ臂に懸けたる簀には シテへ白黒の慈姑あり

地へ破れ簀 手にした笠を見ガサ シテへ破れ笠 地へ面ばかりも隠さねば シテへま

二「旦暮之命不知、左臂懸破、篋右手提壞、笠頸係一囊、背負一袋、袋容何物、垢膩之衣、囊容何物、粟豆之餉、笠入何物、田黑鳥、此篋入何物、野青蕨、肩破衣懸胸、頸壞、篋纏腰、葡匐問、徘徊路頭」(『壯衰書』)。

三粟や豆の乾燥食料。

三垢やあぶらで汚れた着物。

四竹籠に慈姑。「白黒」は「田黒」の誤解か。

5

五「顔さえ隠せぬからまして霜雪雨露をしのげず、涙を抑えようにもその袂も袖もない」。

六「さすらひ」(金春・喜多)に同じ。「さざらひ」(宝生)、「さずらひ」(金剛)とも。

七「恨み心を起し、乱心し……といううちにもまた物に憑かれた心となり、声が変り異様な状態となつて」。

八「ねえ何か下さいよ……」狂乱の物乞い。

九四位の少将の憑き物による人格の転換。

一〇「どうしてわけの分らぬことを言うのか」。

一一「恋心が強くて、あちこちから書いてよこす恋文は五月雨の降るごとくだから、嘘でも返事すればよいに一度もせず」。小町の橋慢心。

一二小町に懸想し百夜通う。《通小町》参照。

一三「数々の恨みの報いが廻つて来て」。「車トアラバ……めぐる」(『連珠合璧集』)。「車の榻」次頁注六参照。

一四月こそ通ひ路の友、に「人知れぬわが通ひ路の関守は……」(『古今集』恋三、業平)の表現を重ねた。

一五「思い留まれるものか、さあ出かけよう」。

卒都婆小町

して霜雪雨露

正面へ少し出

地へ涙をだにも抑ふべき

袂も袖もあらばこそ

今は路頭にさそらひ

往來の人に物を乞ふ

乞ひ得ぬ時は悪心

た狂乱の心へつきて

声変はりけしからず

杖をからりと捨て

「問答」

シテへのう物賜べのうお僧のう

箆を両手に擡げてワキへ迫る

着座のまま

「小町がもとへ通はうよのう

ワキ「おことこそ小町よ

なにと

て筋なきことをば申すぞ

正面へ向き

シテ「いや小町といふ人は

色が深うて

あなたの玉章こなたの文

へかきくれて降る五月雨

見上げ(空・虚言)

の「そらごとなりとも一度の返事も無うて

へ今百歳になるが報

うて

あら人恋しやあら人恋しや

いかなる者の憑き添ひてあるぞ

シテ

「小野に心かけし人は多き

中にも

殊に思ひふかくさの四位の少将の

正面へ向き

「歌」

地へ恨みの数の廻り来て

車の榻に通はん

日は何時ぞ夕

暮

月こそ友よ通ひ路の

関守はありとも

留まるまじや出で立た

ん

一 白布仕立の袴。その裾を引き上げて動き易くすること。観世以外はこの一句の後【イロエ】になる。古写本にカケリ、又はハタラクとも。

二 立烏帽子の中途を折り曲げて風折烏帽子とする。狩衣の場合に着用の略装。

三 「時雨トアラバ…木のは」(『連珠合璧集』)。秋の心。下の「雪」(冬)と対。

四 軒の氷雪からしたたり落ちる水。歌語。その音が「とくとく」。

五 豊明節会にも参会せず、小町にも逢わぬながら通いつめる庭に、鶏は時刻通り暁を告げ、その時車の榻に通った数を書きつけて。「豊明節会」は、新嘗祭の翌日天皇が新穀を食し群臣に賜う儀式。国栖の奏樂や五節の舞が行われた。

六 「暁のしぎの羽かき百羽かき君が来ぬ夜はわれぞ数かく」(『古今集』恋五)を「榻の端書」と解する百夜通いの説話による。前注、及び「通小町」参照。

七 へあと一夜を残すだけとなつて。

八 へこのような因果をみるにつけても、後世の成仏安楽を願うのはもつともなことだ。

九 へ砂を集めて塔を作り(小さい功德を積み重ね)、黄金の膚(仏身)を磨くように細やかに仏に仕え。乃至童子戯、聚沙為仏塔、如是諸人等、皆已成仏道(『法華經』方便品)に基づき、「聚砂為塔人、早研黄金膚、折花供仏輩、速結蓮台趺」(『童子教』)等という。

【物着アシライ】で後見座にくつろぎ烏帽子長絹を着け扇持つ

常座に立ち
【歌】 シテ 浄衣の袴かい取つて 地へ浄衣の袴かい取つて 立烏帽子を風折り 狩衣の袖をうち被いて 人目忍ぶの通ひ路の 月に

真中へ出
も行く闇にも行く 雨の夜も風の夜も 木の葉の時雨ゆき深し

角を見上げ
【□】 シテ 軒の玉水とくとくと

正面へ少し出 右へ戻り
【歌】 地へ行きては帰り 帰りては行き 一夜二夜三夜四夜 七夜八

夜九夜 とよの明りの節会にも 逢はでぞ通ふにはとりの 時をも

真中へ出
変へず暁の 榻の端書き 百夜までと通ひて 九十九夜になりた

た指を見つめ 大小前へ退り
り シテ へあら苦し目まひや 地へ胸苦しやと悲しみて 一夜を

き平座して顔を伏せ
待たで死したりし 深草の少将の その怨念が憑き添ひて かやう

に物には 狂はするぞや

本心に戻つて
【キリ】 地へこれにつけても後の世を 願ふぞまことなりける 砂を

塔と重ねて 黄金の膚こまやかに 花を仏に手向けつつ 悟りの道

座へ回り
座へ回り 悟りの道に入らうよ